

第3章 ディスカッション・各グループのレポート

1 政策グループ

ファシリテーター：

PY：32名

(1) ディスカッション・テーマ・クエスチョン

新型コロナウイルス感染症（あるいは類似する危機）に関連し、有効で人々に受け入れられ、社会全体の利害に関係する政策を、我々はいかに策定し実行できるのか。

(2) 事前課題

個人課題

職場の方針に焦点を当てたシナリオ（政策サイクルと政策上の課題を考えるように設定されたもの）について考え、さらに、どのようにそれを作り上げ実施可能なものにするかについて考察すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 「政策」は法律・規則よりも強く反映されるものであり、公式な方針であることを認識する。
- 適切な範囲の専門性と視野から得られる情報に基づき、かつ、それによって過度に遅延をきたすことのないプロセスを導く。
- 政治的分裂はいつ埋まるのか、果たして埋まるのかについて考察する。

活動

- 「政策」とは何を意味するのか、そしてその構成要素は何か。
- 新型コロナウイルス感染症対策又は危機対応政策策定に際して、政策はいかに生み出されるべきで、誰が（どのように）助言を受けべきか。
- 政策策定は政党・政治的分裂を横断する形で成されるべきか。

成果

- 政策決定は、幅広い対人能力と組織力を必要とする多面的な任務であることについての理解。
- 政策横断的な行動と建設的意義の不在における利点・危険性の認識。

課題別視察

受入先：公益財団法人松下幸之助記念志財団 松下政経塾 活動

- 松下政経塾の取組・精神についてプレゼンテーション
- 問題解決の小グループ・ディスカッション

視察から学んだこと

- 学生が創造したシラバスの価値
- 長期的危機の解決手法

グループ・ディスカッションII

ねらい

- 競合する利害、という繰り返される政策課題を検討する。
- 社会の異なる階層における多様なニーズをいかに満たすことができるかを探査する。
- PYが上記の主要な課題に焦点を当て、「正しい」答えは具体的な状況によって変わり得るという認識に至るようにする。

活動

- 例えば、公衆衛生と経済的利害とのバランスを取るべきか、また、取ることができるのか。
- 異なる世代における特定のニーズは、新型コロナウイルス感染症政策とその運用に、どのように反映できるのか。
- 新型コロナウイルス感染症政策は、公衆の一部における「当事者意識（ownership）」や「受容（buy-in）」を危険にさらす要素を持つのか。もし持つのであれば、それはどのようなものか。

成果

- 成功する政策を策定するための、十分な情報に基づいた判断、及び、時として生ずる利害の衝突の均衡。
- より広範な社会における「受容（buy-in）」の達成をいかに行うかの確認。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 危機状況下においては制限があるかもしれないことを認識しつつ、ガバナンスの基本原則を検討する。
- リスクとリスク管理、及び政策とリスクの関係について探索する。
- 広義の「成功」について考えることを推奨する。その中には、経験的vs逸話的、短期的vs長期的、認識vs現実、という要素も含む。

活動

- 政策の策定と実施にはどれくらい透明性があるべきか。
- 危機下においてより多くの人々、漠然とした計画よりも、明確な方向性を求めるものか。
- パンデミックあるいは類似する危機において、政策策定と運用は本当にリスク管理の演習なのだろうか。
- 我々は政策もしくは複数の政策の成功をどのように計測できるのか。

成果

- 政策リスクと適切な透明性に対する実践的な解決策の特定。
- リーダーシップ、リスク管理及び意思決定能力の向上。
- 調整のとれた多分野にわたる作業と、より広範な文化横断的理解。

(4) 成果報告

- DG1では、政策は「人々の権利又は責任を規定する戦略（暗示的であれ明示的であれ）であり、特定の懸念に対応する有用な行動の道筋を提供し、国民の幸福を向上させるものである」という結論に達した。
- DG1は、公衆衛生であれ、ほかの何かであれ、どのような危機にも適用できる政策枠組みを探求した。政策サイクルは基準値であるが、観念論的なもので

あり、実践的な適用が必要であることが合意された。危機下において、特定の問題と需要に対しては、状況に特化した対応が必要である。

- 政策助言は、危機下においても引き続き重要であるが、時機にかなったものでなければならない。しかしながら、他の全てに優先するニーズは、公衆の当事者意識よりも「受容 (buy-in)」であり、信頼を獲得して維持することである。意思決定から必然的に排除される人々がいることを考えると、特にネガティブな影響を受ける可能性のある層に対して、有効な連絡・通信チャンネルが必須である。
- 危機下において政策を実行する上で、地方における調整は重要な要素であり、構築すべき国家全体の回復力にとって不可欠である。しかし同時に、DG1は政府内の調整も必須であることを強調したい。

(5) ファシリテーター所感

- DG1はディスカッション及びそこから生まれる解決策に関して非常に建設的であった。小グループでも全体でも、全てのPYが等しく積極的に参加し、互いの意見に耳を傾け、有為な分析力を発揮した。
- DG1のPYは深い考察のもと判断し、合理的な討議を重ね、明確なコミュニケーションをとることができた。
- 生み出された政策枠組みと戦略は、パンデミック、既存の学術分野や実践分野から得られる見識、及びPYが代表する11の国における幅広いベストプラクティスからの学びを盛り込んだものである。
- ファシリテーターを務めるという特別の機会をいただいたことに大変感謝している。私たち全員によるセッションが各グループのPYの意思決定とリーダーシップスキルの向上、より大きな文化横断的認識、そして強く長く続く友好に資することになれば幸いである。

2 外交グループ

ファシリテーター：

PY：32名

(1) ディスカッション・テーマ・クエスチョン

外交は我々の生活にどのような影響をもたらし、青年はどのように外交に関与できるか

(2) 事前課題

個人課題

PYは事前に自らにとって最も重要な外交課題と自国にとって重要な外交課題について提出した。

(3) 活動内容**グループ・ディスカッションI****ねらい**

本DGの目的とゴールを理解し、自分なりに外交とは何かを定義する中で、外交の役割について理解する。

活動

- a. 講義「外交に関する基礎知識」
- b. 8グループに分割し、自己紹介及び以下のトピックでディスカッション。(1) なぜこの事業に参加し、何を成し遂げたいか、(2) 外交の役割とその目的は何か。

成果

ディスカッションを通し、自らのテーマに対する関心について触れるとともに、各々が外交をどのように定義しているか共有する機会となった。また、冒頭の講義で、外交は国民の命、領土、主権を守り、その過程で自国の利益の最大化を図ることが目的であることを学んだ。また、PYは本事業を通し自らがどのように自国を代表できるのか考え、行動に移すことが奨励された。

課題別視察**受入先：外務省****活動**

外務省報道課課長補佐を講師として迎え、外務省の組織、外交官の仕事や外務省がどのような人材を求めているかといった話に加え、新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延が外交の世界にどのような影響をもたらしたかについてお話をうかがった。

視察から学んだこと

視察を通じ、外務省の機能やその仕事について理解し、組織としてどのように外交に臨んでいるのか学ぶことができた。講演は多岐に渡り、青年がどのように外交分野に貢献できるか考えるきっかけともなった。

グループ・ディスカッションII**ねらい**

事前課題を共有する中で、我々を取り巻く外交について理解し、それらが日々の生活にどのような影響をもたらしているか理解する。

活動

- a. 視察の振り返り
- b. オンライン上の白板を使い、自らを取り巻く外交について意見交換
- c. 各々の興味分野に分かれ小グループで討議

成果

本セッションを通じ、外交は多岐にわたる分野で役割があることを理解し、国際的な協力が社会課題の解決には不可欠であることを学んだ。ディスカッションでは様々な社会課題の解決に向け、各々が自国を代表し、自国の立ち位置や強みを理解しどのように貢献できるか話

し合った。

グループ・ディスカッションIII**ねらい**

外交における青年の役割を理解する。

活動

- a. 講義「外交の多面性」
- b. 以下三つのテーマでの討議：「社会課題の定義とその解決策」、「外交における青年の役割」、「青年が外交を行った成功例の共有」

成果

セッション冒頭でファシリテーターから外交の多面性について簡単な講義があり、PYは外交が政策としての側面、技術（交渉や情報収集など）としての側面があることを理解することができた。その前提を踏まえ、上記三つのテーマでディスカッションを行い、主に外交分野における青年の役割について意見を交わすとともに、解決すべき課題に対しどのように自らが主体的に行動を起こせるのか、またそれらの活動を通し、外交の最大の目的でもある「自国の利益の最大化」をどのように図ることができるのか一人ひとりが考える機会となった。また、問題解決にあたり、自らがどのような強みやスキル、ツールを持っているのか考えることが求められ、PYの中にはこの事業に参加し、日本・ASEANの青年間のネットワークを持つことができたことで、今後社会的課題に直面した時にこの事業での経験やネットワークが強みになるとの発言もあった。

(4) 成果報告

青年がどのように外交に関与し貢献することができるのか、デジタル・ツールやSNSの活用によって国際的な問題提起を起こすことや、次世代を担うリーダーとしての認識を持ち、目の前の問題解決にさまざまなリソースを持ち寄り解決を試みることなど具体的に起こすことができるアクションプランと共に発表された。続いて、本事業そのものが、オープンで自由なディスカッションを促すことで多国間の友情を結び、相互理解を促進すること、日本とASEAN各国から参加する全てのPYの知識やネットワークを広げる役割を担うことで日本及び参加国全ての外交としての側面があることが指摘された。また、外交努力は継続の先に成果があることが挙げられ、本事業に参加したPY一人ひとりが、より良い社会の構築への不断の努力を続けることが、小さな社会変革のきっかけとなり、その力が集まることで歴史は変わると結論づけられた。最後に、本事業に参加したPYこそが未来のリーダーとなると心に誓うことで、より良い世界へ一歩近づくと力強い宣言で発表が締めくくられた。

(5) ファシリテーター所感

まず初めに、本グループに参加した青年に心からの敬意を示したい。全ての参加者がオンラインという枠組みの制限がある中にもかかわらず、自らの考えやアイデアを積極的に共有し、ほぼ全てのセッションにおいて、ファシリテーターは議題を投げるだけで実質的な議論は全て参加者によって主導されていたことがとても印象的であった。

今回は3回のセッションというとても短い時間ではあったが、回を重ねるごとに、参加者一人ひとりが、単に参加者として事業に臨むのではなく、自国を代表する青年外交官であるという認識を持ち、他国の青年から学びながらも、掲げられたディスカッションテーマに対し、自国がどのような役割を担うことができるのか、ま

た自らがどのようにその問題に取り組んでいくのかという主体性が育まれていることを実感した。本事業が参加者にもたらすポジティブな影響を感じるとともに、本事業が青年育成の中で重要な役割を占めていることを強く認識させられた。

短い事業期間の中にあっても実りあるディスカッションを展開し、公式プログラム外においても最終プレゼンで学びの成果を示そうと自主的に集まり意見交換を続けた全ての参加者に改めて敬意を示すとともに、ここで出会った青年たちが近い将来世界を牽引していくのであろうという確信に近い印象を強く受けた。改めて彼らの努力と本事業に残した成果に賛辞を贈り、本プログラムの総括としたい。

3 教育グループ

ファシリテーター：

PY：31名

(1) ディスカッション・テーマ・クエスチョン

破壊、欠乏、そして脱構造：私たちは新型コロナウイルス感染症の大災害下において、さらにその後において何を学び、再学習し、念頭から消し去るべきなのだろうか。現在の状況・背景に歩調を合わせ、不確実な未来に備えるべく、教育と学びの取組を変革する戦略に焦点を当てる。

(2) 事前課題

個人課題

教育セクターを超えて教育と状況・背景とのつながりを理解するための助けとなるものとして、PEST分析を個人課題とした。

国別課題

各国はそれぞれの教育制度について簡単な情報を準備すること。これによりPYは、ASEAN各国と日本における教育目標、政策、そして課題について共通の理解・考えを持つことができる。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

最初のセッションは、1) ASEAN各国と日本における教育についての問題、課題、政策、2) 政治的、経済的、社会的そして技術の発展がどのように教育に影響を及ぼすか、に対するPYの意識向上を目的とする。これらの要因は教育転換に向けての破壊もしくは推進力である。

活動

- ASEAN各国と日本における共通の目標、問題、そして課題の特定
- 教育におけるPEST分析

成果

PYは二つの共通する教育目標を識別する。

- 全ての人に平等な教育へのアクセスを推進すること
- 特に学習者が動的な労働市場に備えるという面と、継続的な労働力の開発という面において、教育の質を高めること

最も緊急かつ重要な課題は、1) 教員の質、2) 教育の不平等さ、3) 政策と予算配分の齟齬、4) 時代遅れのカリキュラムと学習アプローチ、5) 教育におけるデジタル技術、である。これらの課題が新型コロナウイルス感染症拡大によって増幅された。

PEST分析は、教育の転換を推し進める破壊的要因を掘り起こすものである。顕著な要因には、1) 労働市場のダイナミズムとスキルギャップ、2) 新型コロナウイルス感染症拡大、3) 高齢化社会による非従来型の高齢学習者、4) オンライン学習と情報格差、5) 教育の不平等、がある。

課題別視察

受入先：トビタテ！留学JAPAN

活動

- トビタテ！留学JAPANの紹介
- トビタテ！留学JAPAN帰国生からの経験共有

視察から学んだこと

- トビタテ！留学JAPAN構想の背景にある論拠は、学

習プロセスを人的資本開発、そしてソフト・パワーと経済的競争力向上に結び付けようというものである。

- b. 教育における出資者の重要性。出資者は、財政的支援を提供し、これによって学習者の機会が拡大し、プログラム管理における柔軟性が向上している。
- c. 海外留学は、学力とソフトスキルの両方の開発に役立っている。例えば自立、異文化及び言語能力などの点が挙げられる。

グループ・ディスカッションII

ねらい

セッションIIでは、教育制度における欠点、考えられる解決策、そして出資者の役割を特定するPYの能力開発に焦点を当てる。

活動

教育格差分析と考えられる解決策、そして出資者の役割の特定。

成果

PYは、利用しやすさと質という二つの側面に焦点を当て、現在の教育制度と学習アプローチにおける欠点を特定する。

- a. 利用しやすさにおける主な問題は、特に弱者集団、低い社会経済状況にある家庭出身の学習者、そして労働者の間における不平等性にある。この課題に対応するためには、政府と民間セクター両方からの支援、より柔軟性のある学習方式、そして障害者に必要な施設が求められる。
- b. 質に関して、大学卒業生の有する能力と労働市場のニーズのギャップという点での懸念がある。これは教員とカリキュラムの質が低いこと、試験を重要視した学習アプローチ、そして品質保証制度がもたらした結果である。さらに、保護者と学習者は成績重視の学問を選びがちだが、これは経済セクターには役に立たない。このような問題に対処すべく、PYは、教員養成、TVET（技術・職業教育訓練）の推進及びカリキュラム改訂に焦点を当てた。これには政府、民間セクターそして教育行政者の総力を結集することが必要である。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

セッションIIIでは、プロジェクト開発とビジネスアイデアの小プレゼンテーション活動を通して、PYのプロジェクトマネジメント、協働、そしてプレゼンテーションスキル開発に焦点を当てた。さらに、このセッションでは国連の持続可能な開発目標（SDGs）の4番目「質の高い教育」に対する意識創出も目標とした。

活動

- a. SDG4：質の高い教育、についての討議

- b. 教育プロジェクト・ビジネスアイデアの小プレゼンテーション

成果

SDG4に関して、PYはSDG4について、その7つの目標と他のSDGsとのつながりについての基本的な知識を得た。プロジェクト・ビジネスアイデアの小プレゼンテーションでは、PYは教育プロジェクトを開発し、それをDGメンバーにプレゼンテーションするために、小グループで作業と協働を行った。各プレゼンテーションはよく練られたもので、事後活動の強い可能性をもったものであった。聴衆からは、PYが自分たちのプロジェクト設計やプレゼンテーションスキルだけでなく、アイデアに磨きをかける助けとなるような貴重なコメントが寄せられた。

(4) 成果報告

ディスカッション・テーマ・クエスチョンは「破壊、欠乏、そして脱構造：私たちは新型コロナウイルス感染症の大災害下において、さらにその後において何を学び、再学習し、念頭から消し去るべきなのだろうか。」である。プレゼンテーションの目的は教育と学習アプローチが現在及び未来の状況に足並みをそろえられるような提言をすることである。いくつもの破壊力が存在してはいるが、DG3では労働市場のニーズと学習者の能力のギャップに焦点を当てる。この課題は教員やカリキュラムの質の低迷とともに、教育における利用しやすさの欠如と、不平等さに起因している。

DG3の提言は五つ：1) 事前及び現任の教員研修制度の向上、2) カリキュラム改革、3) 予算配分の改善、4) 非公式教育の推進、5) ICT施設と学校インフラの更新、である。さらにプレゼンテーションには、教育と学習の改善のための意識喚起とアイデアの収集を目標とした事後活動も含まれている。DG3は2021年4月に事後活動を開始する計画である。

(5) ファシリテーター所感

日本政府に対し、この事業を主導し、ASEAN各国と日本の青年に協働、交流、友好の機会を与えてくださることに感謝の意を表したい。新型コロナウイルス感染症拡大は人と人とのつながり方に大きな影響を与えている。したがって、この困難な状況下において、オンライン交流は最も適合するものである。

私はPYのエネルギー、高潔性、そして互いに共有し学び合おうという姿勢に感銘を受けた。彼らは必要に応じて、リードする立場になったり、協働したりしている。彼らの性格、能力、そして可能性をもってすれば、彼らがリーダーとなり、日・ASEANの協力の力強い礎として、予測可能な未来を築いていくであろうことを私は確信している。

4 グローバル企業グループ

ファシリテーター：

PY：30名

(1) ディスカッション・テーマ・クエスチョン

グローバル企業を通して、青年はどのように社会変革に貢献するだろうか。新型コロナウイルス感染症は、今後青年がその一員となる利益追求型の企業をどのように変移させるだろうか。

(2) 事前課題

個人課題

ファシリテーターがセッションの関連性を高めるための参考となるよう、DGのトピックに対するPYの理解と経験についての質問に答えること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- ねらいの範囲設定及びグローバル企業（ビジネス目標と社会的影響の両面）の紹介
- グローバル企業における若いプロフェッショナルの役割についての理解
- PYが自分たちのコミュニケーションスキルを演習

活動

- ファシリテーターによるDG導入
- 小グループ：グローバル企業経験のあるPYがその知識を経験のないPYに共有した。
- 各小グループごとに、その他のPYに対して小グループで学んだことを発表した。

成果

ファシリテーターとPYは、DGトピックについて双方が理解したことに合意した。PYは積極的に考えを共有し、経験が少ないPYの方が、トピックについてより果敢に質問し、討議した。

課題別視察

受入先：EY Japan株式会社

活動

- EY Japanの代表から、一般的なグローバル企業についてのプレゼンテーション
- グローバル企業について、また、新型コロナウイルス感染症との関係についてPYによるディスカッションと共有

視察から学んだこと

- パンデミックの変動性、不確実性、複雑性、曖昧性（VUCA）の時期において、グローバル企業はビジ

ネスを展開する市場で、ポジティブな社会的影響を与える力を持っている。

- 多くのグローバル企業はデジタル技術を活用して、社員の働き方を状況に合わせて調整している。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- グローバル企業において、青年が力を発揮できることは何か理解する。
- グローバル企業のビジネス目標と社会的影響は必ずしも衝突しないことを理解する。
- 意思決定者に提言が受け入れられるようにするための外交的スキルをPYが身に付ける。

活動

- 「青年の力」についてオープン・ディスカッション。
- PYが社員だと想定して、ビジネス目標のニーズを満たしつつ、いかに社会的影響に貢献することができるか、という状況提示がファシリテーターからなされた（PYは小グループでディスカッション）。

成果

利益追求型のビジネスが悪いものではないこと、そして利益をより大きな社会的影響を生み出すことに使うことが目標であることを、PYは理解した。PYは自分たちの力を理解することで、ギャップを把握し貢献するきっかけをつかんだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- グローバル企業において、より良いオペレーションを形作る中で新型コロナウイルス感染症がどのような役割を果たしているかを理解する。
- 多文化的状況において、自分の能力を示すための積極的なやる気と自信ある態度を持つ。

活動

- 前回の確認として、PYは各グループの提言を共有した。
- 新型コロナウイルス感染症が、どのように人々の行動とグローバル企業の役割を変化させているかについてディスカッション。

成果

PYは青年として、自分たちが行うあらゆる取組において、意思決定者に対する影響力、そしてささやかであっても常に社会的影響を与える力を持っていることに自信をもった。さらに、新型コロナウイルス感染症はよ

り多くの企業が影響を基盤として製品やサービスを提供する推進力となっていることをPYは理解した。

(4) 成果報告

- 青年の役割と青年に対する認識：青年に対する「固定観念」から、様々な目的を持ったグローバル企業において青年が貢献できる「機会」への転換。
- 新型コロナウイルス感染症がどのようにグローバル企業に影響を与えているか：世界をつなぐグローバル企業が革新、人々の行動変化、そして社会的影響を与える能力を持っていることを示す。
- 戦略的提言：(1) 青年が持続可能性の問題に対して

推進力となり、デジタル変化に適応できるようにする。

(2) グローバル企業は社会的影響を考案し推進する。

(5) ファシリテーター所感

「東南アジア青年の船」未来会議は、日本とASEAN各国の未来のリーダーが、自分たちに何ができるのかを理解する素晴らしい手段であり、DG4のPYはディスカッションに積極的に参加した。内容の理解に加えて、PYは自分たちが組織に属し、多くの利害関係者を説得する必要に迫られているという状況設定の中で、多くの可能性を討議したが、これは素晴らしい演習となった。

5 起業グループ

ファシリテーター：

PY：31名

(1) ディスカッション・テーマ・クエスチョン

私の社会的起業：持続可能な報酬を確保しながら、社会的影響を与えることを可能にするにはどうしたら良いか。

(2) 事前課題

個人課題

PYは、調査をして、自分が良いと思う企業を選び、文化的あるいは社会的側面での価値創造においてその企業が持つ価値を探ること。さらに、その企業を持続可能にしている歳入の流れを特定すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 互いを知る。
- 起業家精神と社会的起業家精神の基本を知る。
- PYにとって大切なことは何かを特定し、更に深い変化のための基盤を作る。
- 影響の種類を理解する。

活動

- 対話形式の活動による導入
- 今後使用する基本用語と取組について双方向プレゼンテーション
- 6グループに分かれてのグループ・ディスカッション：自分にとって大切なことについて考えをまとめる。問題を特定し、目標設定を始める。
- 理論、ビデオとクイズ：変化の様々な種類と、組織的变化が直接的变化とどのように異なるのかについて知識をテストする。（直接的变化、規模的直接変

化、組織的变化、考え方の変化)

- 次回までの宿題：グループごとに取り組みたい問題に対する影響の種類を考察する。

成果

- 6つのグループが、自分とつながりのある6つの問題を特定した。
- PYは、それらの問題に対するビジョンという形で6つの宣言を発表した。

課題別視察

受入先：株式会社ボードレス・ジャパン

活動

- 株式会社ボードレス・ジャパンのスピーカーは、ビジネスとは何か、起業家精神とは何か、という点に力点をおいてPYを啓発する内容を語った。
- その後、グループ活動を行って終了した。
- PYにボードレス・ジャパンのビジネス、バン格拉デシュにおける革産業が紹介された。
- Q&A

視察から学んだこと

貧困、機会の欠如、そして人種差別といった社会問題に対して、そして開発途上国に対してその土地の状況とニーズを考慮しつつ労働力とノウハウを提供することを目的として、企業はどのようにビジネス・ソリューションを考え出すことができるのか。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- システムを通しての課題・問題の分析

- 最も妨げとなる三つのシステムを特定することにより、課題を実行可能なものとする。

活動

- セッション I の宿題の発表（問題、ビジョン、影響を与える方法）
- システムの論理、ビデオ、グループ・ワーク、そしてシステムとは何かを深堀りしつつ、システムを変えることの有益性について、グループ内で発表し、問題に影響しているシステムの特定を始める。
- 次回までの宿題：理論とワークシートをグループで記入

成果

6つの異なる問題と、その解決策として多くの選択肢（24以上）を得た。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 5R（資源、役割、関係、規則、結果）の構造を用いて各システムを分類し、システムを変える方法を見いだすべく深堀りする。

活動

- セッション II の宿題の発表（私たちの問題に影響している三つのシステム）
- システムの論理、ビデオ、グループ・ワークと5Rについてグループ内で発表
- グループ・ワーク：自分たちの問題に対する変化についての宣言を作成
- ディスカッション成果報告の計画作り

成果

PYが解決したいと考える6つの問題に対する6つの変化についての宣言

(4) 成果報告

- ディスカッション・クエスチョンの説明
- ディスカッション・クエスチョンに答えるための経過を述べる：何かの問題に目を向ける、ビジョンを生み出す、自分がどの種類の影響を創造したいか選択する、それに影響を与えているシステムとそのシステム内にあるRを見つける。最後に、変化のステートメントを作成し、ビジネス・ソリューションと共に、そのステートメントに従って行動する。
- グループ・ディスカッション中の、6つの変化ステートメントの短いプレゼンテーション

(5) ファシリテーター所感

31名のASEAN及び日本のPYが、利益を生むだけでなく社会的・文化的影響を与えるための道筋として起業家精神を探索するプロセスの場を開き、ファシリテーターを務めることができ、大変感謝している。このトピックは、私が日本政府主催の「世界青年の船」事業に参加した後に私に起こった、個人的な変化に大変関連があるものだ。この事業参加をきっかけとして、私は社会起業家となったからだ。DG5のPYが、ディスカッション、そしてトピックにまさに適合しているボーダレス・ジャパンへの課題別視察から、社会的あるいは文化的影響を与えるインスピレーションを得てくれればと願っている。

6 ICT グループ

ファシリテーター：

PY：30名

(1) ディスカッション・テーマ・クエスチョン

私たちが求める未来とは何だろうか。情報通信技術の力で、私たちの未来を改めて想像し直すにはどうしたら良いのだろうか。

フレームワーク：組織開発に対するアプリシエート・インクワイアリー（AI）の5Dアプローチ（定義、発見、夢、設計、実行）

(2) 事前課題

個人課題

AI 5Dアプローチの最初の二つの段階（「定義」と「発見」）に関して、PYは各自事前振り返りを記入するにあたり、自国で最も記憶に残るICT又はデジタル革

新を検討すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

このセッションの最後に、PYは以下の項目ができるようになる。

- アプリシエート・インクワイアリー（AI）アプローチとは何かを説明する。
- PYの人生の中で、包括性において技術が持つ可能性に心が動いた、特別な瞬間を共有する。

活動

- DG6へのオリエンテーションと何を期待しているか

の確認

b. Miro.comにおけるAIの定義と発見段階

成果

セッションIはプログラムの準備と関係構築が中心であったが、ディスカッション中に、日本とASEANにおける新型コロナウイルス感染症対応について、相違点よりも類似点の方が多いという深い認識を得ることとなった。さらに、PYは、新型コロナウイルス感染症対応における技術の適用は、公衆衛生に留まらず広範な分野に及んでいることについても予想以上にはっきりと認識していた。

課題別視察

受入先：多国籍アパレル企業ITディレクター

活動

- 多国籍企業がパンデミックに対処している方法の共有
- 未来の職場の特徴についてのディスカッション

視察から学んだこと

2時間の課題別視察を通して、PYは人間の意思決定が全て人工知能に取って代わられるわけではないこと、そしてパンデミック期間中、医療用のICTツール使用のただ中であっても、ビジネスプロセスにおいては通信回線が変わらず担保されていることを学んだ。

グループ・ディスカッションII

ねらい

このセッションの最後に、PYは以下の項目ができるようになる。

- AIの「夢」段階において、DGが夢見る2030アジェンダを説明する。
- 自分たちのハッカソン（短期集中プログラム開発）チームを作る。
- 自分たちの言葉で、この世代の地球市民から期待される21世紀のリテラシー（知識・能力）を説明する。

活動

- 課題別視察の共有
- Zoom上でのAI「夢」段階
- 社会問題・課題の根本原因と結果を明示するための未来像の図式化演習
- ICT、メディア、そして国連の持続可能な開発目標について小講義

成果

セッションIIは「夢」段階を中心に据え、セッションIの成果をもとにして、政治的、社会的、そして経済的分野においてパンデミックが中心的、直接的、間接的にもたらす結末について、PYが再度深く考察する場となった。PYは、持続可能な開発に向けた技術やメディアといった21世紀のリテラシーの存在の重要性も認知した。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

このセッションの最後に、PYは以下の項目ができるようになる。

- ハッカソン経験がどのように感じられるか説明する。
- 新型コロナウイルス感染症対応・復旧についての自分の強い理念を3分間の小プレゼンテーションで語る。

活動

- ハッカソン活動について及び発想と計画策定へのビジネスツール使用についてオリエンテーション
- 小グループでの「設計」と「実行」段階
- 自分自身の小プレゼンテーション資料制作とレコーディング
- 成果報告会の準備

成果

各「スタートアップ・チーム」内での3時間のハッカソンを通して、AIの「設計」と「実行」段階が実現された。ここでPYは、多様な背景を持った若いリーダーたちと協働する力を高め、可能性のある投資家、パートナー、チーム・メンバーに向けての力強い小プレゼンテーションを作り上げた。

(4) 成果報告

ここではPYは、自分たちのディスカッション成果（例：ハッカソンのピッチ（小プレゼンテーション）・アプローチを使った協働的ICT関連プロジェクトのアイデア）を全体で発表した。彼らの技術ソリューションには以下のものが含まれる。

- Well-Fam：自分、専門家、そして地域の精神面サポートを提供するアプリ
- FUndTURE：企業のためのクラウド・サポート・プラットフォーム
- Green Panda：環境に優しい食物を届けるプラットフォーム
- Fresh Nest：社会的責任を果たす「農場から食卓へ」配送と学習アプリ
- EdFun：学習者と教育者を安全で楽しい環境で結び付けるマイクロラーニングのアプリ

(5) ファシリテーター所感

新型コロナウイルス感染症パンデミックは、まさに社会のあらゆるセクターにおける強みと弱みを露呈することとなった。今年度の「東南アジア青年の船」未来会議はユニークな形で行われたが、このタイミングは日本とASEAN地域におけるこれからのリーダーの人生における非常に重要な時期に当たっていた。この時期、世界のリーダーが一つの目標（対応し、復旧し、パンデミック以前よりも良い状況になるよう復興すること）を胸に集結した。また、世界的な開発手段、そして目標までもが

持続可能性という方向で見直された時期でもある。

10か国から集まったICTグループのPYは、「より良いノーマル」達成に向けて自分たちが果たす重要な役割のみならず、新型コロナウイルス感染症対策と復旧、すなわち誰も取り残さないという目的に用いられる、技術ベースで、技術に支えられ、技術によって可能となっているあらゆるアプリケーションについて、それらの根本原因と起こりうる帰結について深く意識を集中させるために一同に会したのだった。

一見するとバーチャルな設定は、このような深いディスカッションを行うにはあまりに課題が多いと思われるかもしれない。しかし、今年度のICTグループのPY

は、そのような意見を持つ人々、そして私に対しても、それが誤りであることを証明した。16時間に及ぶ集中的なプログラムは、PYが安心して鋭い質問をし、最も弱い立場にいる人々のニーズに真に寄り添い、気持ちを向けた実践的な解決策を導き出すことのできる場として機能した。PYは、地理的な境界や文化的多様性とは関係なく、若者が自分たちのニーズを最もよく知っており、自分たちのコミュニティに変化をもたらす中心的存在であることを証明してくれた。若者は彼ら自身に影響する事項についてのみ、意見を聞かれれば良いのではなく、全ての意思決定の席につくべきなのである。

7 NGO/NPO グループ

ファシリテーター：

PY：31名

(1) ディスカッション・テーマ・クエスチョン

連帯ネットワークに向けて青年が牽引するNGO/NPO：新型コロナウイルス感染症時代における持続可能で革新的な危機対応を探る。

(2) 事前課題

国別課題

PYは国別に、自国で既存のNGO/NPOについての国家政策とメカニズムをまとめること。各国はグループ・ディスカッション・セッションIで5分間のプレゼンテーションをすることとした。内容はPowerPointのスライドにまとめることとし（最大5スライド）、そこには以下の要素を盛り込むこと。

- NGO/NPO登録に際して関係する政府機関及び（もしあれば）その他の機関
- 自国で一般的にみられるNGO/NPOの種類
- 自国におけるNGO/NPO活動分野（教育、環境、保健医療、水と衛生、心理的サポート）

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

日本とASEANにおけるNGO/NPOの役割、指針と戦略への理解を通して、新型コロナウイルス感染症パンデミック下において青年が牽引する活動と関与を促進する。

活動

双方向ディスカッションとアイデア・マッピング

- PYはそれぞれの国別課題を他のPYに発表する。
- プレゼンテーション後、PYは新型コロナウイルス感

染症パンデミック下における青年が牽引する多様な活動と関与の例について討議する。

- 次に、情報リテラシーに基づき、PYは新型コロナウイルス感染症パンデミック下でのNGO/NPOの行動における役割、指針と戦略について日本とASEAN間の相違点と類似点をマインドマップにする。

成果

新型コロナウイルス感染症の時代に、青年が牽引する活動と関与において主導・参加することにより、青年が積極的な市民としてボランティア・貢献できるように力づける。

日本とASEANの青年が牽引するNGO/NPOへの参加における役割、指針と戦略についてその相違点と類似点の理解を促進する。

課題別視察

受入先：特定非営利活動法人だっぴ

活動

- 特定非営利活動法人だっぴの紹介
- 質疑応答

視察から学んだこと

- NGOとNPOの違い
- NPO運動の立ち上げ方
- 人道的運動の異なる側面において、青年がどのように関与できるのか

グループ・ディスカッションII

ねらい

新型コロナウイルス感染症の時期における資源動員の

適応計画を特定する。

活動

シナリオを基にした事例研究と討議

- NGO/NPO資源動員に関して適応戦略計画を明示する。その中には新型コロナウイルス感染症期における資源活用、ロジスティック管理、そして資金配分を含む。

成果

新型コロナウイルス感染症危機下で資源動員に関するNGO/NPOの主要課題を明示し、適応計画を準備する能力を強化する。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

日本とASEANの新型コロナウイルス感染症予防と管理戦略に関して、SWOT分析を用いてNGO/NPOにおける青年の役割を評価する。

活動

ゲーム・ストーミング：SWOTマトリックス分析

- PYは新型コロナウイルス感染症危機と新型コロナウイルス感染症後の危機のシナリオでグループに分かれ、SWOTマトリックス分析に基づく持続可能なNGO/NPO戦略計画における青年の役割を特定するタスクに取り組んだ。

成果

日本とASEANにおいて、組織的持続可能性の手法を持つ青年のNGO/NPOへの関わりと参加を促進させる。

(4) 成果報告

PYは持続可能な、青年が牽引するプログラムにつ

いて厳選されたアイデアを持った「JASEAN YOU(th) NION」プラットフォームを立ち上げた。そこには、短期的、長期的目標の両方を備えた、社会的・地域社会的サービス、青年から青年へのサービス、情報サービス、ソーシャルメディア経由の日・ASEAN協働、などがある。

(5) ファシリテーター所感

内閣府に対し、私をファシリテーターの一人に選んでいただいたことに感謝申し上げたい。そしてまた、常に誠意をもって支えてくださったスタッフの皆さんにも謝意を表したい。本当にエネルギーにあふれ、この事業を成功に導いた、他DGのファシリテーターにもお礼申し上げる。また、ディスカッション・セッションの最初からエネルギーで、積極的で居続けてくれたPYにも感謝している。彼らが私のDGのPYだったことを嬉しく思っている。

プログラムはオンラインで行われたが、グループ・ディスカッション・セッションを1～2コマ増やし、バーチャル・コミュニケーションのツールを統合して双方向で興味をそそるグループ・ディスカッション・セッションを生み出すことができれば、もっと効果的であっただろう。例えば、私は小グループを使って、PYが協働しながら学べるようにし、成果報告準備の際には、より包括的なディスカッションができるようPYに求めた。

また、PYが自国で実施する事後活動は、ディスカッション・トピックに基づいたものが多いので、事後活動を成果の一つとして次年度以降の成果報告で示すこともできる。

8 環境・災害グループ

ファシリテーター：

PY：30名

(1) ディスカッション・テーマ・クエスチョン

ASEANと日本における過去の環境問題の管理からの学びを基にした、新型コロナウイルス感染症の管理とそこからの復興において、青年が果たす役割は何か。

(2) 事前課題

個人課題

以下の三つの文章（各1ページ）を読むこと。それぞれ、各ディスカッション・セッションで扱うトピックに関連している。

- a. 国連「仙台防災枠組2015-2030」

- b. OECD「2020 若者と新型コロナウイルス感染症：対策、復興と危機管理能力」

- c. UNDP「2020 新型コロナウイルス感染症からの復興：アジア太平洋地域における過去の災害からの学び」

国別課題

自国の政府又はNGOによる、環境とリスク低減に焦点を当てた取組又はプロジェクトに関して、3分のプレゼンテーションを準備する。プレゼンテーションは以下の点についてのものとする。

- a. このプロジェクトに自分は参加しているか。しているなら、どのような形での参加か（例：ボランティア

- ア)。していないのなら、課題は何か。
- b. そのプロジェクトは新型コロナウイルス感染症の影響を受けているか。受けているなら、それにどのように対応しているか。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- ASEANと日本における最も一般的な環境災害のいくつかをPYに紹介する。
- ASEANと日本における環境災害による社会的、経済的影響を討議する。
- 青年の参加、健康の危機、そして防災戦略の面から、仙台防災枠組の優先行動を分析する。

活動

- a. 国別に、自国における最も一般的な自然災害と人災のいくつかを共有し、それらの災害に対応した経験や、自国の社会及び経済への影響について発表した。
- b. ファシリテーターからPYに対し、仙台防災枠組に関して、対象範囲、目的、優先行動、期待される成果、対象とタイムラインなどの主要な側面の紹介をした。
- c. PYはグループに分かれ、青年の役割、健康面パンデミック、及び災害リスクという点について仙台防災枠組を研究した。

成果

- PYが特定したASEANと日本における一般的な環境災害は、新型コロナウイルス感染症に加えて洪水、地震、干ばつ、地滑り、大気汚染、台風であった。
- 経済損失（例：GDP低下）に加え、環境災害は社会経済的に困難な状況にある自国の人々に対して、不均一な目に見えないコストと課題を課すものであることをPYは学んだ。
- 仙台防災枠組に関して、政府の規制と調整の役割を理解しつつ、PYは青年が変化をもたらす主体であると捉え、法制度、国の実践と教育カリキュラムにのっとった防災に貢献する手段と機会を提供されるべきであると考えた。

課題別視察

受入先：国際航業株式会社

活動

国際航業株式会社からの3名の担当ゲストスピーカーとの双方向セッション。各スピーカーから社内における自らの業務について紹介があり、その後PYとのディスカッションとなった。

視察から学んだこと

- a. 新型コロナウイルス感染症の最中であっても、災

害が止むわけではない。しばしば同時に発生する（例：台風、洪水）。したがって、我々は準備を怠ってはならない。

- b. 国レベル、国際レベルでの防災における民間セクターの参画は、民間セクターと一般市民にとって有益である。
- c. 技術的ツールは、防災の全ての段階で必須であり、特に避難における初期対応者やその後の復興段階において求められる。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- ASEANと日本における防災の取組に関連した概念と課題を理解する。
- 災害の影響低減に対する新型コロナウイルス感染症の影響を分析する。

活動

- a. PYは、災害リスクガバナンスの概念と、優れた防災ガバナンスプロジェクトの開発・実施における課題について討議した。
- b. PYは、環境災害の影響予防と低減のための現行の取組に対する新型コロナウイルス感染症の影響を分析することを主眼とした国別課題を共有した。

成果

- PYは、優れた防災ガバナンスプロジェクトには、災害を予防し、備え、管理し、そこから復興するために活用できる十分なレベルの能力と資源が必要であることを学んだ。またそれは、青年を含む市民が自らの利害関心を明確に語り、その法的権利と義務を実行するメカニズムとプロセスを必然的に伴うものである。
- PYから、国別課題で示されたプロジェクトの大半が、その運用、予算、その他の面において新型コロナウイルス感染症の影響を受けていると報告した。また、それらのプロジェクトで適用されたいくつかの戦略についても報告があった。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 防災、緊急管理、災害リスク管理あるいは災害救済の理念、防災の4つの段階、を理解する。
- 青年が防災のプログラムに参画する上での課題と、可能な解決策を特定する。
- 新型コロナウイルス感染症管理とそこからの復興のための防災からの学び、及びそのプロセスにおける青年の役割を特定する。

活動

- a. PYは、防災全体の理念とその4つの段階について討議し、その後、防災に関するASEAN ERAT

(ASEAN緊急対応評価チーム)と、JICA(国際協力機構)のボランティアプログラムとフィリピンでの管理運営について紹介を受けた。

- b. PYはグループに分かれ、防災プログラムに青年が参加する上での課題とその参加を増加させるための可能な方法について討議した。
- c. PYはグループに分かれ、新型コロナウイルス感染症の時期においてどのように洪水に備えるべきかについて、地域リーダーに対する提案作りに取り組んだ。
- d. PYは、新型コロナウイルス感染症の管理と、そこからの復興に適用できる防災からの主要な学びについて全体で討議した。

成果

- PYは、防災が自然災害あるいは人災への対応プロセスに言及するものであることを学んだ。その中には、予防、準備、対応、そして復興の4つの段階がある。
- PYは、自分たち防災への参画を制限する最も一般的な課題には、時間の都合、プログラムへの適合性、認識の欠如、参加するために必要なスキルの欠如があると述べた。PYからは青年に的を絞った提案がなされたが、その提案は青年が防災の取組に参加できる環境を作るための関係する利害関係者からの支援を強化するという点に焦点を当てたものであった。
- PYは、どのようにして新型コロナウイルス感染症期間中に洪水を管理するかという点について、自国の地域リーダーに対する6つの提言をまとめた。
- PYは、新型コロナウイルス感染症の管理とそこからの復興に適用できる防災からの主要な学びとして10の項目を特定した。

(4) 成果報告

PYの中から、DGクエスチョンについての以下の考察について共有する発表者を3名選出した。

- 仙台防災枠組による防災の定義、防災の4段階、そして新型コロナウイルス感染症パンデミックの期間

にも災害は止まないという注意喚起。

- 新型コロナウイルス感染症に適切な防災からの4つの学び。技術的ツールの重要性、社会的及び空間的アプローチ、民間セクターの関わりと青年の協働。
- 新型コロナウイルス感染症管理とそこからの復興において青年が直面している一般的な4つの課題、そして防災と新型コロナウイルス感染症管理において、青年の参加をいかに向上させるかについての4つの提言。
- プレゼンテーションに続き、参加者による活発な質疑応答が行われた。青年が個人レベルで国及び地域にどのような役割を果たすかという点に質問が集中した。

(5) ファシリテーター所感

セッションがオンラインであることを考えると、当初私は神経質になっていた。Wi-Fiの接続性に全く問題がないことは私にとって喜ばしい驚きだった。このパッチャルな環境設定は、ディスカッション・セッションでのPYの熱意と積極的な参加に、何ら影響を及ぼさなかった。私が担当したDGにおいて、これ以上のPYは望むべくもなかっただろう。なぜなら彼らは、ファシリテーターとしての私に対してだけではなく、DG内の仲間に対しても礼儀正しく、トピックに対して熱心で、積極的に参加してくれた。積極的なPYに恵まれたこのDGと共に活動できたことは、私にとって本当に幸いであった。グループ・ディスカッションの成功は、(一財)青少年国際交流推進センターのスタッフによる真摯なサポートと準備によるものであることも申し上げたい。加えて、課題別視察先(国際航業株式会社)の選択にも感謝している。なぜなら、彼らはDGにおけるトピックについてPYに共有して下さる熱心なスピーカーの方々だったからだ。最後に、日本政府内閣府及びASEAN各国政府に対し、会議を支援しPYを集結させていただいたことに感謝の意を表したい。

9 インフラグループ

ファシリテーター：

PY：32名

(1) ディスカッション・テーマ・クエスチョン

新型コロナウイルス感染症に照らした持続可能な都市計画：より健全な未来、より良い公共福祉、経済発展と復興、社会セーフティネット、そして環境への責任を目指してどのように努力できるのか。

(2) 事前課題

個人課題

各PYは、自国の仲間と討議した後、関心あるインフラの種類についての短い文章（最大250ワード）を書くこと。

国別課題

PYは、自国のインフラ構造について、パンデミック前と後、両方の状況について自国の仲間と討議すること。自国の地理的位置、気候、政治的及び経済的制度、エコロジーと文化が、自国のインフラ開発と都市計画にどのように作用し、あるいは影響したかについて討議すること。

(3) 活動内容

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 持続可能なスマートシティについて、また、スマートシティがどのように人々の生活様式を変え、環境へのネガティブな影響が低いものなのかについての知識を提供する。
- PYが自国のインフラ問題を認識し、他のPYの国におけるインフラに対する視野を広げられるようにする。
- PYが、自国政府による都市計画と都市設計に影響を与える、自国の強みと弱点を理解できるようにする。

活動

- PYは各自1分で自己紹介をした。
- ファシリテーターが、持続可能な都市、国連の持続可能な開発目標、ソフト・ハードインフラ、そして持続可能なインフラの理念について紹介した。
- PYから、自国のインフラ状況についての文書共有があり、他国のPYからコメントあるいは考えの共有があった。
- PYは互いに、自国のインフラに問題があるのはなぜか、何がその問題の原因なのかについて共有しあった。
- PYは、自国においてパンデミックがどのようにソフト・ハードインフラに影響を与えたか、それが翻っ

てどのように自分たちの生活様式や環境に影響したか、そしてパンデミック中の生活、仕事、娯楽、通勤通学、さらに旅行について各国政府や国民はどのように対応したか、を討議した。

成果

- PYは、考えを共有するディスカッションから、いくつかの国ではより良いソフト・ハードインフラがあることを知り、また、持続可能なソフト・ハードインフラを自国に適用すれば、より安全で、より良く、より健全な生活状況が生まれることを学んだ。
- PYは、自分たち自身と将来の世代にとってより良い未来を創造するためにいかにして人間、地球、そして利益を共存させたら良いのかを学んだ。
- PYは自国、他国の問題あるインフラの原因を学んだ。その後でPYは、自国のインフラを、特にパンデミック後においてより回復力のある持続可能なものにするにはどうしたら良いかを討議した。

課題別視察

受入先：三井不動産株式会社

活動

- 「わたす日本橋」プロジェクトがPYに紹介された。
- CGS（コジェネレーションシステム）、エネルギー消費とCO₂排出を30%削減する新たなエコ・エネルギー・システムがPYに紹介された。
- 「柏の葉スマートシティ」、明日への新たなビジョンを創造するスマートシティがPYに紹介された。

視察から学んだこと

- PYは、「わたす日本橋」プロジェクトが、東日本大震災からの復興を支援するための三井不動産株式会社の取組であることを学んだ。これは、南三陸と日本橋の間、そして人々と未来の間に心の橋を「わたす」試みである。地元の人々と社員の交流とボランティア精神を推進している。
- PYは、構築しなくてはならないのは、通常の都市でもスマートシティでも、どちらでも構わないことを学んだ。社会や都市を創造する上で最も大切なことは、リーダーシップと人的資本である。
- PYは、費用はかかるが持続可能なエネルギー・システムを使用することが、人々と地球の安全のために必要であることを学んだ。

グループ・ディスカッションII

ねらい

スマートシティについて、特にパンデミックの期間において、それが管理、意思疎通、市民や他の住民とのより良い関係の面でどのような形で政府を助けることができるか、そしていかにそれが環境への影響を低減しつつ、経済的、社会的、文化的発展と復興への解決策をもたらし得るか、という知識をPYに提供する。

活動

- a. PYは、課題別視察で何を学んだかを共有した。
- b. PYは、パンデミック後に復活を遂げつつ、経済的、社会的、文化的発展への解決策を提供するために、スマートシティに何ができるかについて討議した。

成果

持続可能なエネルギー・システム、「わたす日本橋」プロジェクト、そしてスマートシティ・プロジェクトである「柏の葉スマートシティ」を含む課題別視察からのPYの学びを共有することで、持続可能なソフト・ハードインフラがいかに地球を救い、次世代にとってより良く、より安全な未来を創造するか、そして人的資本とリーダーシップがハードインフラと同じくらい重要であることを、PYは理解した。PYは、社会的責任、どのように優れたガバナンスでビジネスを行うか、そして若いリーダーとして自分たちの都市の未来の形成に自分たちがどのように貢献できるか、について学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

PYが自らのビジョンと情熱を共有すること、そして、リーダーシップを発揮して大きな視野と革新的な思考で、全ての持続可能なソフト・ハードインフラを備えた夢の持続可能なスマートシティを構築することによって、世界をポジティブに変えていくことを促す。

活動

- a. PYは、問題ある自国のインフラ、その問題分析、さ

らに、それを自分たちの生活と地球にとってより良く、より持続可能に、より安全に修正するにはどうしたら良いか、についての意見共有を継続した。

- b. PYは小グループで、自分たちの夢の持続可能なスマートシティに敷設したいと考える様々な種類のソフト・ハードインフラについて、さらに、なぜそれらのインフラを備えたいのか、それらがどのように人々や地球に有益なのか、について討議した。PYは、都市名、誰が自分たちの都市に住むのか、その都市の政治的、経済的、社会的、文化的そして環境的システムと政策、その都市はどのように運営されるのか、どのような活動が行われるのか、知事はどのように都市内の住民と意思疎通をし、関係を築き、運営していくのか、夢の都市の外の地域社会との交流はどうするのか、について討議した。

成果

PYは、概念的提言の中に全ての持続可能なソフト・ハードインフラを盛り込んだ、自分たちの夢の都市を構成し、その夢の都市を実現するためにどのように資金調達をしたら良いかを学ぶことができた。

(4) 成果報告

PYは、3回のセッション全ての成果と課題別視察で学んだことを盛り込んだ、自分たちの夢の持続可能なスマートシティ（エーデルワイス・スマートシティ）について発表した。

(5) ファシリテーター所感

- a. ディスカッション・プログラムは、3回のセッションを課題別視察と組み合わせている点において、非常によく考えられ、運用されていた。専門家から直接学ぶという素晴らしい好機を得たが、これは稀な機会である。
- b. プレゼンテーション準備のために、もう1コマ追加のセッションがあると良い。

第4章 「東南アジア青年の船」事業の在り方提言

日本・ASEAN青年交流における「東南アジア青年の船」事業の在り方検討会議による提言

1. 要旨

この提言は、「東南アジア青年の船」事業の既参加青年が、事業の価値、課題と解決策についてまとめたものである。事業の使命として、日本とASEAN10か国の参加青年及び既参加青年がどのように、国を越えて友好を育み、将来に渡って相互理解を深めるかについて議論する。

既参加青年が考える事業の価値は、次の5つに分類される。1) 国内外における親密な関係を構築する、2) 異文化理解を促進する、3) ディスカッション・グループで扱う社会的課題を実社会に結び付ける、4) 地域社会へ社会的インパクトを創出する、5) 青年の潜在的可能性を最大限に伸ばす。

また、既参加青年が事業を改善するために挙げた課題は、各国における参加青年の募集及び事前研修から始まり、船内活動、日本国内活動及び訪問国活動、事後活動、既参加青年のネットワークにまで及ぶ。それらの課題に対する分析と解決策の提示に加え、解決策に対する評価指標にも言及する。

2. 「東南アジア青年の船」事業の価値

「東南アジア青年の船」事業における各既参加青年の経験は一人ひとり異なり特別なものである。ここでは国際的な友好の構築や青年育成に対して、本会議での議論を経て明らかになった既参加青年の考える本事業の価値を5つの分類で以下に提示する。

(1) 国内外における親密な関係を構築する

「東南アジア青年の船」事業は、日本及びASEAN10か国に関する意識を高める基盤としての役割を果たしている。また、当該地域における重要問題や、私たち青年が社会にどのような貢献ができるかを話し合う場となっている。これらが互いに結びつくことで、キャリアを共に築いたり、共同プロジェクトを行ったりすることを可

能にする。そしてこれは、積極的な国内外の事後活動への参加によって更に強化される。

(2) 異文化理解を促進する

事業期間中、参加青年は、ディスカッションやその他船内活動、訪問国の地元青年との交流を通じて文化的な示唆を得ることができる。また、ナショナル・プレゼンテーションを通じて各自の才能を発揮し、ホームステイや課題別視察を通じて直接的な体験をすることができる。以上により、互いの文化を知り、そして多様性の豊かさを感じることで、各国の伝統を尊重し、自国の伝統を継承する一員としての意識を喚起する。

(3) ディスカッション・グループで扱う社会的課題を実社会に結び付ける

ディスカッション・グループでのピア・ラーニングは、特定の国が抱える課題解決のケースに基づき、理論及び実践面で参加青年を啓発するものである。ここで生まれたアイデアが、既参加青年による事後活動の強化に役立つ。また、意見交換や新施策の提案を通じて、自国では得られなかったであろうイノベーションやディスカッション・トピックへの深い知識の獲得が可能となる。

(4) 地域社会へ社会的インパクトを創出する

本事業での学びは、事後活動を通じた後輩たちへの働きかけ等のコミュニティへの社会的インパクトを創出することを可能にする。

(5) 青年の潜在的可能性を最大限に伸ばす

船内活動を中心とした本事業の内容は、リーダーとしての役割や経験を通じて参加青年の自己成長、人格形成及び潜在的な可能性を引き出すことができる。また、日本国内活動や訪問国活動で得られる多様な交流は地元青年に対しても良い影響を与え、本事業の経験を共有することで将来彼らが本事業へ参加する動機を形成することに繋がる。

3. 課題と解決策

(1) 参加青年の募集と各国における事前研修

課題	解決策
ASEANの国によっては、応募者が限定的ないしは都市部に集中し、多様性に欠けてしまうことがある。	- 人気のあるデジタル・メディアを用いて広報することで全国の青年に広報を行き渡らせる。
参加国によって募集・選考方法に偏りがある。	- ガイドラインがない国は、各参加国政府が協力し、選考・事前研修のガイドラインを既参加青年と共同で作成する。 - 将来的に、各参加国政府が募集・選考過程を監督・評価する統一のプラットフォームを構築する。
事前研修の期間が短いため、特にディスカッション・グループの準備が十分にできないことがある。	- 事業前から、オンライン・ワークショップなどで、ファシリテーターと参加青年との連絡をとるべき。 - 選択したディスカッション・グループで準備をする「試行期間」を設け、当初の認識と異なる場合はグループの変更も可能とするよう検討する。

(2) 船内活動（ディスカッション活動、PYセミナー）

課題	解決策
ディスカッション・グループでの時間が魅力的に映らず、ディスカッションに消極的な参加青年がいる。また、事業期間中の議論が事業後の活動に繋がっていないことがある。	- ディスカッションは、より双方向的な形態で運営されるべきである。また、毎回のセッション後に参加青年がファシリテーターへフィードバックを行えるようにする。 - ファシリテーターに対してアクティブラーニングのワークショップを実施し、ファシリテーターは事業期間中の議論にワークショップで学んだことを実践する。 - リーダーシップやタイムマネジメントなど、ライフコーチングに関する活動を増やす。 - ディスカッション・グループの成果を、「ハッカソン」形式でアイデア出しに活用し、事業中や事後活動の実際のプロジェクトに繋がるようにする。 - 参加青年が事業後にフィードバックを行い、翌年の本事業に加えた方が良い新規ディスカッション・テーマの提案を行う機会を用意する。 - 事後活動は参加国単位で一つ行うのに加え、ディスカッション・グループ単位でも一つ行い、ディスカッション・グループの議論を事業後も継続させる。
PYセミナーのトピックには、慎重に扱うべきものがある。	- トピックは、文化の観点から友好的なもので、楽しく、魅力的で、直接の一次的な体験ができるものと明確に定義されるべきである。

(3) 日本国内活動及び訪問国活動（課題別視察、ホームステイ）

課題	解決策
訪問国によっては、課題別視察が室内での座学に限定されることがある。	- ゲームの手法やプレゼンテーション、スタディツアーなど多様な要素を取り入れた課題別視察など、座学以外の双方向の形態を導入すべきである。
ASEANの訪問国によっては、課題別視察が、ディスカッション・テーマとの関連性が薄いことがある。	- 課題別視察とディスカッション・テーマが関連性を持つために、視察の訪問先リストを調整し、ファシリテーターと事前に確認することを検討する。
日本及び訪問国におけるホームステイ期間が非常に短い。	- ホームステイマッチング会場からホストファミリーの家に到着するまでに時間がかかるケースを考慮し、ホストファミリーと過ごす時間を十分に確保するため、ホームステイを3泊4日に延長することを検討する。

(4) 事後活動

課題	解決策
持続性、可視化できる成果、また事後活動の効果測定手段、監督・評価の仕組みがない。	- 効果測定のための一連の指標、活動の要件、事後支援や事後評価の仕組みを設定する。 - 効果があり実行可能であることが証明された過去の事後活動は、次の世代の参加青年が継続できるようにする。
既参加青年による積極的な参加が不十分であり、国を越えた事後活動についての実態があまり目に見えないことがある。	- 事後活動の認知を高めるため、影響力を持った既参加青年やステークホルダーを巻き込み、活動内容を認知してもらいやすい説明資料や広報資料を作成する。 - 事後活動の認知度を向上させるため、メディアとパートナーシップを結ぶなど連携する。 - 貢献度を上げるため、事後活動において世代を越えた共同作業を促す。
参加国や地元政府からの支援が不十分である。	- 各参加国政府や各国事後活動組織は、事後活動に関する経済面や管理・運営面での全面的支援を行う。 - 各参加国政府は、各事後活動が社会的インパクトをもたらし、持続性も担保されるよう監督する。

(5) 既参加青年のネットワークと事業後の関係性

課題	解決策
事後活動組織のウェブサイトやSNSが活発に活用されていないケースがある。多くの既参加青年は都市部で活発に活動しており、国内でのネットワークの拡充が不十分である。	- LinkedIn等のツールを活用して、各参加国の既参加青年のプロフェッショナル・データベースを策定する。 - 既参加青年の交流を継続するため、現在開催されているSSEAYPインターナショナル総会（SIGA）や船上既参加青年の集いなどの他、都市と地方を繋ぐ新しいコンセプトのイベントなどを開催する。 - 海外に居住する既参加青年を、居住国の事後活動組織ネットワークに組み込む。
事後活動組織の形態や構成要員が固定化されており、変化の速度が遅いことがある。	- 事後活動組織においては、世代や参加年次に偏りのないことを要件とする - 各国の事後活動組織の組織構造を明示し、毎年更新する。

4. 主要な指標の提案

事後活動組織と事後活動の継続性と発展性を客観的に測定するため、以下の指標を提案する。

項目	測定単位	2022～2025年	2026～2029年	2030～2033年
・各年の事後活動件数 ・参加人数	・活動件数 ・合計参加人数	・年間3件 (うち1件は国を越えた活動) ・150名	・年間4件 (うち2件は国を越えた活動) ・300名	・年間5件 (うち3件は国を越えた活動) ・500名

5. 終わりに

「東南アジア青年の船」事業は日本とASEAN10か国の持続的な協力の証であり、青年間の友好と相互理解を促進する本事業が存在することに私たちは感謝している。「東南アジア青年の船」事業の価値は長期間にわたる船内での活動や共同生活でこそ培われるものであり、その価値を高めるために、更なる改善が行われることを期待している。私たちは本事業の既参加青年として、これまでに築き上げられた貴重な財産と善意を継承するために引き続き努力していきたい。

現在は世界的に困難な状況下にあるが、私たち一人ひとりが社会に貢献し、交流を深め、協働し続けることが、本事業の成功に不可欠である。具体的な施策の例として、各参加国政府と連携しながら、広報内容の改善、事業前

の準備期間や事業後の事後活動で活用できるデジタル・プラットフォームを構築していくこと等が挙げられる。

現時点での本事業の既参加青年は、ナショナル・リーダーを含めて、合計13,000名以上である。この成長する組織にとって不可欠なのは「リユニオン」と「リジェネレーション」であると考え。つまり、本事業を通じて出会った人々と再会（「リユニオン」）する感動を共有し、事後活動組織が築き上げたものに新しい風を吹き込むことで、より良い組織へと進化していくこと（「リジェネレーション」）が大事である。「東南アジア青年の船」事業が「一生に一度の出会い（一期一会）」であると信じている私たちは、本提案を通じて、本事業が今後更に発展していくことを願っている。